

え 文 武 通 万 石 通

質、文に勝つて野暮なり。文、質に勝つて高慢なり。文質元結人品として月額青き君子國。五穀の外に挽きぬきのおそば去らずの重忠が、智慧の斗辨に謀られし、大小名の不知の山、三國一斗一生の恥を晒せし七湯泉の垢、とけて流れて三島にあらぬ大磯の化粧水に、しらげすませし文武二道、萬石通と名づけしを富士の裾野の葛十が需に應じて龜山人作。

ニヤ
質勝文野暮也。文勝質高慢也。文質元結
人品として月額青き君子國。五穀のあり
おそばのちりきり去らずの重忠の斗辨の
謀り。大小名の不知の山。三國一斗一生の恥と
晒せし七湯泉の垢とけて流れて三島にあらぬ
大磯の化粧水に、しらげすませし文武二道あるを
名づけしを富士の裾野の葛十が需に應じて


[illegible]

申すべし。又文で
もなく武でもなき
ぬらくら武士多か
るべし、三つに分
けてお目にかけま
せう。」

「御人拂ひの御用は
何であらう。何か
文脇茶釜で劍菱を
飲むと云ふやうな
聲が聞えた。」

「秩父殿は四相を悟
ると云ふがお寺か
ら使の來る事を悟
るのかね。」

「さればもし雙六の
賽の目の事か。」



かくて重忠謀にて、
富士山の中に不老不
死の薬あり、鎌倉の
大小名人穴より入り
此薬を求むべし、と
仰せ渡されければ、
不老不死の薬と聞き
皆々富士の人穴にぞ
入りにける。



重忠神樂堂（かたがは、かたがは）の禰宜（ねい）の身振（みぶり）にて下知（げち）する、

「見合つてく、

是で大概一番の
樹は仕舞うた。」

「人穴三文く」。

先知らぬ穴は富

土の根いつとてか
小櫛こぬかもどきに

武士の降るら

$$h_c$$

いよいよ
あゝ
うん
うん
うん



文武二道萬石通

富士の山穴の内の態
 「俗物の行かれぬ所
 だ。」



「何だか乙な所だの。
「きついこたアねえ、
はいれ〜。」



「この粘ねるのが不老
の薬かの、さて怪け
しからぬ潤うるはひだ。

せんば
二万のわふ
あらうのけ
ねくちの
せんば
せんば
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた



「長命の場だらう。」
 「體が大ぬら〜だ。」
 どうも足が踏み止
 められぬ。ア、
 どうも〜。」
 「是がほんの穴へは
 まつたと云ふのだ。
 あな憎や〜。」
 「妖怪がおらが手合
 を恐れたかして、
 一疋も出なんだ。」
 「ねつから張合が無
 かつたの。」



「文人より武勇の
人が餘計でござりま
す。然しねらくら
の方がしたゝかに
ござります。扱か
くの如く仕分けま
したは米搗の千石
程からの存じつき
でござります。」

「文より武の勝つた
るは珍重々々。長
く世の静な程、自
然と文は勝つもの
だ。己が世話を焼
くは其處の事だ。」

ねくらの大小名を
見分け、文武兩道の
内に勤め込むべき由
仰せを受け、箱根の
七湯へ御暇賜はる條
諸司の別當工藤左衛
門へ申渡す。

一、此度長生不老



門に人し輩、山氣に中り不快の由、其上山より落候面々も多く有レ之段被レ及二聞召一、箱根の七ゆへ日數三廻りの御暇被レ下候間、申合込合不申様七ヶ所へ可レ有入湯、旨被二仰出、一條可レ被レ得、貴意一候者也

月 日

重忠奉之

「長生不老の抜穴より出たる面々ばかり申渡すごさう。」

「小名へは私より申渡しませう。」



皆きゝをせうといふ原小二郎。香を聞く事は、餘程うぬ野の小太郎。佐原の十郎、茶の湯は飯より好^すにて、朝から茶腹の十郎。



塔の澤の舂

「かげ法師で見ては皆
影法師だ。」
「黒彌五だ。」

「金屋金五郎の風呂
屋の段をお語り。」

「黒彌五さんだから
御所望申しやす。」

「おれが語ると、風
呂屋の段ではない、

「黒彌五段だ。」
「美左衛門」

「手みきんくく」
「たいらくの平馬の

承、將棋をさす時
は桂馬の承さ。時

うすきの八郎、寒
さらな身で居る。
「いばらく待ち給へ。
飛車手、王手をか



けられて、竹の下
のまごつき左衛門
だ。」

「先祖御厨の三郎よ
り傳はりしめくり
さ。」

「おらが先祖はよみ
の宿禰。」

土井の彌太郎、や
たらに匂を吐く。
お臈のとく齋。

「とく場なら致しま
せう。」

「うゑ物が近いで謝
る。」

「人倫よし戀よし平
山の馬所だ。」



堂ヶ島の鉢

「おれがかけ聲は紋
所の矢ア羽アだ」
安西の彌七郎太鼓
の役「小鼓の時は
萬歳の彌七郎さ」
土肥の千二郎喜多
流を舞ふ。

堂ヶ島の鉢

おれがかけ聲は紋
所の矢ア羽アだ
安西の彌七郎太鼓
の役「小鼓の時は
萬歳の彌七郎さ」
土肥の千二郎喜多
流を舞ふ。



「おれが名の龜甲龜
は御免だ。」
きつかにがめ

伊豆の二郎「今日
はすつきりですの
二郎だ。」

「苗字が三浦だから、
獵は得手ものだ。」
のじ



宮の下のお

「しんがいのわらは
せ郎はどうだ。」

「是はあやまるく。」

「的はすつきりお音
がない。太鼓ばか
り成景様。」

「豊後の次郎で義太夫
も氣まぐれだ。」

「弾きながら首をふ
るや五郎。」

宮の下のお

あんなのうらやま
どうして

長
長
長

すくすく
おとこ
おとこ
おとこ



大分
ゆりて
長
長
長

おとこ
おとこ
おとこ

木賀の絆

小四郎義時。

「しゃんと小棲を。」

「おつと皆までかく

に及ばず。うけと

り兜だ。」

「犬坊さんなら、わ

んと小棲はどうだ。」

梶原三郎。

「箱根は駒のよい所

だから、買つて行

きた。」

「私は鶉が欲しい。」

木賀の絆



底倉の鉢

土屋三郎。

「杉曉が身振はどうだ。」

「まづ紋所がきつい身は無茶ぢやわいの。」

「そちが若衆なら、おれは小山だ。」

「りうさい。」

「それ勝つたぞ。」
「口惜しい、滅相に負けるの。」

「とつことな。」

「こんな色子もねえもんだ。」

底倉の鉢



「茶、香、生花、鞠、俳諧は文造へ引込まれる。葎、將菜、亂舞、釣、網は無理に武へこじ付けるがよい。同じ淨瑠璃でも義太夫は武の方へ引込み、豊後と河東は文へ入れずばなるまい。楊弓、小鳥、めくりの三つは何と片をつけたものだ。」

「楊弓は弓の字故、差詰武に誌し、小鳥は不風流ながら文に致しませう。めくりは行司の貰ひか。」

「底倉遊びの方々は身振、聲色、相撲、拳、皆武邊の内へ誌しませう。」

「同じ拳でも本拳は文の場がござります。唐拳は武の事さ。」

重忠廻者石臼藝助ぬらくら次第一々帳面書留め来る。



蘆の湯の鉢

はな
樺澤六郎、本田の
次郎、古代の定九
郎とうかと云ふ身
にて三人を試す。
「金があれば此處へ
出せ。」

「権ばかりは御免下
さりませ。」

「悪くじたばたする
と芋ざしたぞ。」

「命と下帯はお助け
たんのう。」

「たんのう。」

流石大名の事なれば
病かきは一人もなく



芦の湯へは誰も来ず
 といへども、箱根に
 地獄ありと聞きて、
 中洲の氣取にて芦の
 湯の邊りを歩ね歩き
 大きに阿む。
 「女ど侮つて無禮の
 働き、御人體にも
 似合ひませぬ、お
 相手になりませう
 から」
 「今の様に云つたの
 はほんの座興と云
 ふものさ。嫌なら
 嫌で済んだ事だ、
 氣のみちけえ」
 「地獄と見たがこつ
 ちのあやまりさ。」



大磯のてい

現多數の大小名、湯
 場を立ち大磯へ泊り
 し折柄、重忠のはかり
 川下に堤を築かせ、川
 上へ水を切て落し、
 ければ酒匂満水とな
 り、渡る事かなはず、
 皆々大磯に十四五日
 逗留して現を抜かし
 て樂しむ。大磯にて
 は此處こそ金の儲け
 所と思ひ、傾城は晝
 夜三分を一時三分と
 値を上げ、藝者はめ
 りやすむとつに迎ひ
 が三つ程あり、平
 澤が蕎麦は安い所が
 千疋、最中の月八片
 を以て小判一兩にか
 へ、甘露梅一つが一
 匁、丁で南一など減
 相界な事どもなり、減



大名の境、無聞の事
なれば、各々揃ひの
浴衣にて大磯の湯屋
の池を手水鉢と擬へ
百人にておつ取巻き
しは、織子立に異らず
三萬兩の金が欲しい
なあと云ふ聲、百千
の雷の如く、振上げ
たる柄杓は水車、の化
物かと怪しまる。大
磯中の女藝者めりや
すの爲に惣仕舞にし
て同音に歌はせしは
はなんしき貧乏な
り。

「路銀にはとほした
穴のあく事と、身
にぞ知らるゝ、湯
場つらや。下略



めりやすも事終り、
 一イニツ三イツの掛聲
 にて既に打たと振
 上げる。不思議や池
 の内よりも現はれい
 での山吹色三十箱に
 て三萬兩ざぶりぐ
 と持ち出でる。これ
 も重忠の謀なるべし
 「黒ん坊なら技珊瑚
 樹と云ふ場だ。」
 「三つ重ねて三五十
 五だ。」



「此衣類脇差お覺え
がござらう。以來
柔弱はつやうの心を改め武
を勵み給へ。」

重忠の嫡子六郎重保

「地獄かとお目違ひめちがひの女はそれがしさ。

以來はきつと改め
ますでござりませ
う。

「面目次第もござりませぬ」

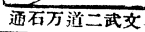
其節の追剥は我々
おひき直

兩人でござります。

「芦の湯にての振舞、
主命なれば御免下
されませ。」



「何ときめられても一言もない。」



頼朝公ぬらくらの大
 小名を召して仰せけ
 るは「さきに重忠に
 はからせ文武の性を
 ふるひ分け、ぬらく
 らの面々は七湯にて
 晒し、大磯にて身上
 をふるはせ、文武二
 道に導かしむ。自今
 以後それ／＼に文武
 の道を學ぶべし。必
 ずしもぬらくらの心
 を持つべからず。今
 にも軍があるならば
 とろ／＼で軍がなるも
 のか。文とも武ツと
 も云つてみる。」
 「いづれも有難う存
 じ奉ります。」

